

# ミュージアム 通信

## そろだ、花見に行こう ～江戸の桜の名所

[資料室談議 第10回]

『都風俗化粧伝』より抜粋・解説  
被り物～帽子のいろいろ

[新連載]

未来の匠

一次世代へ「技」を受け継ぐ人たち—  
紅職人

[かわら版]

第8回江戸の化粧再現講座のご案内



「浅草山中花くらべ」(部分)・国貞・国立国会図書館蔵

## そろだ、花見に行こう～江戸の桜の名所

満開の桜の木の下で、  
春を謳いましょう

久方の光のどけき  
春の日にしづ心なく  
花ぞ散るらむ

右は、『古今和歌集』に  
収載される紀友則作の歌  
である。本歌は百人一首  
にも収められており、数  
多ある桜を詠んだ歌の中  
でも特に有名なもののひ  
とつだ。「こんな穏やかな  
春の陽気に、どうして桜の  
花は慌しく散ってゆくのか  
だろう」と、短い桜の盛り  
を惜しむその心の在り様  
がよく表れている。

かつて花見は、一本桜  
を鑑賞するものだった。  
貴族や武士、一部の文化  
人らが一本の桜を愛でつ  
つ歌を詠むといった風が  
強かったが、それが並木  
桜を愛でる形へと変容し、  
貴賤・老若男女問わず飲  
めや歌えの様相を呈する  
ようになるのは、江戸時  
代に入ってからである。

江戸の花見の名所といえ、上野を筆頭に王子の飛鳥山、隅田川堤、品川の御殿山、日暮里の道灌山などが挙げられる。<sup>※2</sup>このうち、飛鳥山と隅田川堤・御殿山の花見は、八代將軍吉宗の治世に植樹されたものである。吉宗は庶民の遊樂地として、意図的にこれら桜の名所を造り上げた。人々は誘い合って花見に出掛け、満開の桜の下、弁当を広げ、酒を飲み、唄や踊りに興じた。そこには花見客を見込んだ出店が並び、茶番を披露する者や仮装する者が現れ、いよいよ娯樂の觀が強くなる。今とならら変わらぬ花見の光景が、ここより始まったのである。

## 東都第一の花の名所・上野

『江戸名所花暦』(一八二七刊)によれば、東都第一の桜の名所として、上野の東叡山(寛永寺)を



「江戸八景 上野の晩鐘」英泉・国立国会図書館所蔵

挙げる。彼岸桜の開花から始まって、一重桜、八重桜と続き、早咲きから遅咲きまで様々な桜を楽しめる上野は、当時から多くの花見客が訪れた。

通説によれば、当山は將軍家縁の寛永寺境内であったため、酒や鳴物などは御法度、かつ一般人が境内に入れる時間<sup>※3</sup>は限られていた。何かと制約のある花見会場だったようだが、酔客に絡まれる心配もなく桜を愛でることができたため、女性や老人の花見客が多かったという。

## 道程遠し、されど楽しい飛鳥山の花見

飛鳥山は、江戸市中央に向くには地理的に遠いという難点があったが、上野とは異なり、酒食も唄も鳴物も仮装も許されていたので、人々は心置きなく花見を楽しんだ。

左図は揃いの日傘、揃いの小袖で花見に向いた踊りの師匠とその弟子の一行であろう。当時、このように揃いの衣装を身にまとい、芸事の師と門下生が花見に出掛ける光景が多々見られた。これは一説によると迷子防止



「江戸名所 飛鳥山花見乃図」広重・国立国会図書館所蔵

のためであったとか。はぐれてしまっても、同じ格好であれば見つけやすということだろうか。

飛鳥山山頂には、吉宗によって数千株の桜の木が植樹されたことを記す石碑がある(上図左)。植樹後、苗木が成木へと育つとともに、一時は上野をしのぐ桜の名所となったが、幕末の頃にはすっかり枯れてしまい、まばらに桜の木が残る様子であったという。全盛期に比べれば物寂しいが、それでも桜の名所のひとつとして、飛鳥山の名が廢れることはなかった。



飛鳥山の名物遊び「小土器投げ」。花見客は、崖上から崖下へ小さな土器を投げ、その落ちていく様を見ては楽しんだ。  
「江戸自慢三十六興・飛鳥山投土器」広重・豊国・国立国会図書館所蔵

## 花見の場所数あれど、最も賑うは隅田川堤

上野は規制があつて窮屈、飛鳥山は遠い。そんな花見事情の中、江戸庶民が最も行きやすく、最も賑いを見せたのが隅田川沿いの桜であった。枝が覆い重なるように続く桜の並木は、「雲のうちにいるかと思ふばかりなり」と賞され、その勝景たるや諸国に聞こえるほどであったという。堤上・堤下には掛茶屋・料理茶屋が並び、ほろ酔い気分の美女がいれば、花より団子の子供らが駆け回り、あちこちで芝居・茶番が

『みやこふうぞくけわいでん都風俗化粧伝』より抜粋・解説  
 被り物(かぶりもの)く  
 帽子のいろいろ



和

装の結婚式で花嫁が高島田鬢につける「角隠し」は、もともとは「揚げ帽子」と呼ばれた帽子の一種である。その端は、一向宗門の婦人が、参詣時に被った帽子にあるとされる。これが徐々に御殿女中や富裕層の婦女の外出時の被り物となり、そこからさらに転じて婚礼時の花嫁の被り物になったと言われている。

江戸時代、それまでの垂髪が結髪へ変化したことに伴い、帽

子の用途において、風や粉塵から髪を守るという意味が重さを増した。本書の第六部「容儀の部」には、様々な被り物―本書では「被(か)ずき帽子」と記す―が図示されている。そこでは、「綿帽子」・「練り帽子」・「揚げ帽子」・「大坂帽子」・「おそめ帽子」など、多様なスタイルを紹介しており、当時の被り物の豊富さがうかがえる。

江戸後期の風俗に詳しい『嬉遊笑覧』や『守貞漫稿』によれば、頭巾ひとつを見ても優に三十を超える種類がある。男女別、職業別による違いのほか、一時的な流行によるスタイルの差異もあった。ちなみに、特集の挿画「江戸名所 御殿山花盛」の中に、手拭いで頭を覆った女性がいるが、これは花見中の粉塵除けを意図した手軽な被り物である。

※ 綿帽子は、真綿を薄くのはして製したもので、もともとは老いた官女が防寒のために頭に被いたものであったという。しかし、真綿製の綿帽子は徐々に廃れてゆき、縮緬や羽二重といった織物製のものを用いるようになった。

起こった。「墨堤の花見に上越す賑ひなし」と言うに相応しく、人々は堤の春を謳歌した。また、隅田川堤は、少し足を伸ばせば浅草寺や新吉原があり、そちらの桜も一緒に楽しめる好立地だった。

砲台に消えた桜の名所・品川御殿山

嘉永六年(一八五三)の黒船来航によって消えた桜の名所がある。品川御殿山である。

当地は、寛文年間に吉野の地から桜が植樹され、それらがちやうど見頃に育った享保年間、さらに吉宗によって植樹が行われたことで、全盛期には「雲か雪かと疑うほど」の桜に溢れる地となった。

海に臨む御殿山は、晴れた日であれば安房・上総の山々が望めた。眼下には帆船が入津する光景が広がり、それは「いはんかたなし」の絶景だった。しかし、前述の黒船来



前方に海を臨み、弁当を広げる女性たち。  
 「江戸名所 御殿山花盛」広重・国立国会図書館蔵

航を受けて、幕府はこの地に砲台を設置するためのお台場建造を決めた。そうして、かつての名所・品川御殿山は切り崩された。崩壊した名所の姿を広重が「名所江戸百景」の中で描いた話はあまりに有名である。

※1 元来、花見は遊山を目的としたものではなく、春の豊作に先駆け、集団で山籠りをして共同飲食するという信仰的要素の濃い行事であったとされる。  
 ※2 このほか浅草寺、新吉原、小金井堤などが名所として知られた。  
 ※3 花見時の明け六つから暮れ六つ(六時〜十八時)まで。  
 ※4 「たとえようもない」の意。



『都風俗化粧伝』下巻・容儀の部より、綿帽子・丸輪あげ帽子・練り帽子・大坂帽子の小形・揚げ帽子(同うしろ)の図、抜粋。

「次世代へ「技」を受け継ぐ人たち」

紅職人

糸田新一さん

日本の「技」を受け継ぐ若き職人たち。今号よりこのコーナーでは、「技」の未来を担うべく、日々切磋琢磨する方々をご紹介します。第一回は弊社紅職人・糸田新一さんです。

江戸から続く紅の製法は、代々口伝により受け継がれてきた。現在は七代目・澤田一郎氏の下、二人の職人が紅作りを行っ

ている。紅の作業場は職人以外一切立ち入り禁止。社内の人間でも、作業場の様子や、紅作りの詳細は、知ることができない。糸田さんに辞令が出たのは七年前。紅場のすぐそばで、基礎化粧品品の製造に携わっていたこともあった。しかし、この時まで紅の情報を耳にするとはなく、何もわからな



紅花から抽出・精製された紅を筆でお猪口に刷く作業。

踏み込むこととなった。

師匠である川西紅匠から教わったことのひとつに「時代に適応させつつも、昔ながらの伝統技術をしっかりと残していかなければならない」ということがある。紅作りは経験によって培われた「感覚」に左右されるところが大きい。そのため、常にこの言葉を肝に銘じつつ、「感覚」を磨くことに日々精進しているという。

今では紅匠から現場を

任され、紅作りの全工程を担う存在に。常に妥協を許さず、ひとつひとつ丁寧な仕事をする彼の紅は、なんともいえない美しい玉虫色の輝きを放つ。この玉虫色は、良質な紅の証。彼に紅作りの魅力を聞くと、こんな答えが返ってきた。「自分の気持ちを込めて作ったものが、世の中に出て皆様の手に取ってもらえることに、大きな喜びを感じています」より良質な紅を作りたい、その一心で日々紅作りに励む糸田さん。「まだまだ紅作りにはわからないことがあります。そういつた事を少しずつ説明してゆき、よりよい紅作りのための一助になれば」

寡黙で照れ屋の彼から、頼もしい言葉が返ってきた。

かわら版

Information

「第8回江戸の化粧再現講座」のご案内

江戸時代の女性たちは、紅・白粉・墨のわずか3色で粧いました。本講座では、当時の化粧書や美容指南書をもとに、学芸員の解説と共に化粧デモンストレーションをご覧ください。要予約・定員各回15名・参加費無料

2010年5月15日(土)

第1回 午後2時～3時 / 第2回 午後4時～5時

※お問合せ・お申込みは紅ミュージアムまで(03-5467-3735)。

Since 1825

伊勢半本店 ミュージアム

●開館時間 / 午前11時～午後7時 ●休館日 / 毎週月曜日 ●入場無料 (月曜日が祝日または振替休日の場合は、翌日が休館日となります)

東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F TEL&FAX:03-5467-3735

東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」下車  
B1出口より徒歩12分

<http://www.isehan.co.jp>